

### 【メディアを通して惨状を知る】

平成23年3月11日に東日本大震災が発生した。阪神・淡路大震災の時と異なり災害発生直後からメディアによって津波が東北にもたらした惨状を認識することとなった。今回の震災において医療救護班として4月8日～13日の6日間救護活動に参加し、阪神・淡路大震災においても救護活動を行った経験から、2つの救護活動における違い、被災者から求められるケアについてまとめた。

### 【神戸での経験を踏まえて】

阪神・淡路大震災の救護活動においては、災害発生当日の出動であり情報も少なく、救護する側もされる側も未知の状況に混乱していた。患者は災害による挫創や骨折などの外傷が多く、なにもない状況に必要な医療をどのように提供していくか、自分にできることを考えながら活動することになった。それに対して今回の救護活動では、阪神・淡路大震災の災害時の対応の進歩を感じながらもメディアの情報や先行隊などの経験談から災害の状況により対応を変化させる必要があった。

### 【被災者が抱える不安の数々】

今回の活動は災害亜急性期であることもあり、医療に求められるニーズは大きく異なっており、慢性疾患患者への投薬や指導、被災後からの高血圧や不眠への対応が主だった。以下に挙げるように救護所に来る人々の多くは大きな不安やストレスを抱えていた。

- ①家族や家など全てを失った喪失感
- ②これから先の生活に対する不安
- ③震災時の自分の行動に対しての後悔
- ④津波がもたらした家族関係の変化

このような患者達と関わる上で健康管理はもちろんのこと、心のケアの重要性を実感した。救護班は活動期間が短く継続したケアはできないが、逆にずっと関わる人ではないからこそ、家族・経済・生活のことなど地域の人には話せない内容を話すことができるようだ。

### 【救護活動を振り返って】

今回の救護活動が被災から1カ月後ということもあり、1カ月の節目を特別な日として前日までとは表情の異なる人が多かったが、津波の状況や現状に視線を落とす人がほとんどである。被災地以外は平穏を取り戻し、日常の生活が戻っているが、被災地の爪痕はまだ大きく残っており被災者は大きな不安やストレスにさらされている。その中で被災者の思いを聴きながら向き合うことの大切さを実感し、また、被災者以外に住む人は普通に生活できることのありがたさを感じ被災地が1日も早く復興できるよう支援することが重要だと考える。